

「G 史上最大の改訂」again

——語義区分と訳語を見直す



中邑 光男

◆なぜ語義と訳語を見直したのか？

英単語の大まかな意味の分類が「語義」であり、その語義の中で示した日本語が「訳語」である。例えば、次のように、G 4 の見出し語 selection は 4 つの語義区分からなり、1 番目の語義区分には「(慎重に) 選ぶこと」や「『生』淘汰」など 5 つの訳語が与えられている。

- ① **U** **C** (慎重に) 選ぶこと, […に] 選ばれること [*as, for*], 選択, 選抜; **U** 《生》淘汰(とうた)
- ② **C** […から] 選ばれた物 [人] [*from*]; [通例 a～] 選集; 精選品, 極上のもの (*choice*)
- ③ **C** [通例 a～] 品ぞろえ
- ④ **U** **C** [コンピュータ] セレクション 《ハイライトで強調表示されること; 強調表示されたデータ》.

このように、語義と訳語は、用例と並んで、英和辞典の「心臓部」だ。今回の改訂では、これに、我々はメスを入れた。一般的にこのような辞書の心臓部を定期的にチューニングアップすることは、辞書の「地力」をさらに上げるために必要な作業である。しかし、『ジーニアス英和辞典』（以下G）の場合、この作業には特別な意味がある。この作業は、Gの「伝統」と「成長」のために必要となったものでもあるのだ。

「伝統」とは、Gが発刊されて今年で四半世紀が経ったことを指す。その間、時代の変化に応じて新語を加えたり、古くなった語義・訳語を修正・削除したりしてきた。しかしそれが徐々に蓄

積され、語義や訳語を再調整する必要性が生じてきたのだ。

「成長」とは、Gが読者からの指摘を積極的に取り入れてきたことから生じている。大修館書店が発行している月刊『英語教育』連載の「Question Box」ではしばしばGに関する質問を取り上げる。辞書の利用者から送られてくる質問に対して出版元が雑誌を通じて回答を示す、という仕組みを持っているのは大修館書店だけであり、その回答を記述に反映させるのはGに許された「利点」であり、与えられた「指命」でもある。

◆どのように語義と訳語を見直したのか？

語義と訳語の見直しに当たっては、英米の EFL, ESL 辞典を参考にした。特に、G 5 は学習辞典であるため、*OALD*, *LDOCE*, など “big five” と呼ばれる英国系の学習辞典や、*MWALED*, *LAAD* などの米国系学習辞典を徹底的に調査・分析した。その上で、日本人学習者のニーズを念頭におき、語義や訳語を修正していった。この作業は、特に G 4 の A～C ランク語の約 9000 語について丁寧に行った。

では、この語義区分・語義配列の検討をどのように行ったのかを、上記の selection を例にとり、説明しよう。



G 4 の selection の語義 1 は、「選ぶこと」と「選ばれること」を中心とし、それに「選択」や「選抜」という簡潔な訳語を補っており、適切である。しかしこのような動詞派生名詞は原則とし

て[U]のはずである。学習用英英辞典もこの語義は[U]としている。COCAなどのコーパスを見ると、語義1は[U]用法が圧倒的に多いが、不定冠詞を伴う場合も少なくない。ただし複数形のselectionがこの語義を表すことはない。そこで、[C]よりも、[時にa〜]と示す方が正確だと判断できる。

語義1に「淘汰」という「専門用語」があるのは問題であろう。一般語については頻度順で語義を示すことがG5の全体方針であり、語義1には頻度の高い語義・訳語を持つてくる必要があるからだ。G4で語義1に「淘汰」を置いたのは、語義1の「選択、選抜」などの意味に近いためであるが、G5では、語義は頻度順に配列するという方針をより厳密に応用する。そこでこの語義は最後に回そう。

語義2は「選ばれた物・人」の意味であり、これは[C]の語義と考えていいだろう。G4の語義2の前半は、可算・不可算表示の適切さを含めて、問題ないと思われるが、後半の[通例a〜]はどうだろうか。OALDにはThe orchestra played selections from Hollywood musicals. というselectionが複数形の用例がある。COCAなどのコーパスを調べてもselectionsの例は少ない。コーパスを見ると確かにa〜の用例も多いが、複数形の用例も非常に多い。ここで[通例a〜]と示すのは危険だ。削除しよう。

語義2の後半にはもう一つ問題がある。訳語の「選集；精選品、極上のもの(choicé)」だ。「極上のもの」には「質」の観点が入っていることが、この語義のイメージをぼんやりとさせているのではないか。selectionの視点は「選ぶこと」にあるはずで、「極上のもの」を載せると、この視点がぼやける可能性がある。「極上のもの」は削除する。

このように考えると、G5でのselectionの語義・訳語は次のようになるだろう。

- ①[U] [時にa〜] {…を／…のために／…として} (慎重に) 選ぶこと； {…の／…のための／…としての} 選択, 選抜 [of/for/as] ||
- ②[C] […から] 選ばれた物 [人]； {…からの} 選集, 精選品 (choice) [from] ||
- ③[C] [通例単数形で] {商品の} 品ぞろえ, 選択の範囲 (choice, range) [of] ||
- ④[U] [生] 淘汰(とう).

次に、改訂した語義区分・配列や訳語に合うように、用例を再検討してみよう。G4のselectionの語義3には、(1) a good [wide] selection of shellfish 豊富な品ぞろえの貝、と(2) We have a wide [good, large] selection of wine. 当店ではワインを豊富に取りそろえています、という2つの用例がある。各種コーパスの用例を丹念に読むと、このa wide [good, large] selection of ... はビジネス英語でしばしば使われる表現で、商店などが「商品の品揃えのよさ」をいうときにもつばら用いられることがわかる。2つの用例のうち、(2)はこの語句の典型的な使い方を例示しており問題はない。しかし(1)の用例は、特に必要ないだろう。



このように、語義・訳語を再検討することは、語義・訳語だけでなく、実は、辞書の記述のほとんどを再検討することである。その再検討を、ほぼ全ページにわたって行ったのだ。その意味で、G5の改訂の度合いは、「ジーニアス史上最大の改訂を行った」と位置づけられたG4よりも、広く、深いものであったといえるだろう。このような「ジーニアス史上最大の改訂」を再び行ったG5が学習者に寄り添う辞書になっていることを願う。

(なかむらみつお 関西大学教授)